

ユッコラ体験記 ~ 2008年6月フィンランドでの生活 ~

2008年、5月のヨーロッパ選手権(EOC)と7月の世界選手権(WOC)へ。その間にあたる6月の1ヶ月をフィンランドで過ごした。フィンランドでの目的は2つ。1つは世界選手権へ向けた技術の仕上げをすること。そしてもう1つはユッコラへ参加すること。このレポートではユッコラへの参加体験を中心に、フィンランドでの1ヶ月の生活を報告。(EOC、WOCについては別途報告)

ことのはじめ

07年秋、チェコでのトレキャンから帰ってきて、08年のチェコでのWOCで結果を出すためにはもっと高いレベルでのオリエンテーリングをしなくては、そのためには現地トレインやWOCレベルのスピードへの慣れが必要だと考え、5月のラトビアでのEOC参加と、なるべく早い時期からのチェコ入りを決定。さらにその間の1ヶ月、日本に帰ってくることもできるが2回行く費用と1ヶ月滞在する費用は同じくらい、ヨーロッパで調整できればベスト、よいスケジュールが組めないかと世界のウェブサイト nettサーフィンしているとEOCとWOCの間にユッコラがあることに気づく。

ユッコラ(Jukolan Viesti)は憧れの大会。オリエンテーリングのリレーは陸上競技で言えば駅伝と同じで、なんとも言えないドラマがあり、もっとも好きな種目である。そのリレー大会のなかでもスウェーデンのティオミラ(10人リレー)とシュヘマンナ(25人リレー)、それからフィンランドのユッコラ(7人リレー)が世界3大リレー大会で1万人を超える参加者が世界中から集まると聞いて以来、ぜひ出てみたいと思うようになった。

2008年1月、ひとまずフィンランドにいるかつての日本チームのヘッドコーチであるイーキスに連絡をしました。

「ユッコラを走りたいんだけど、どうすればいいと思う？」

彼からの返事は

「もし望むなら、トゥルン・メチヤングヴィヤット(TuMe:彼の所属するクラブ)で走れるようにしてやるぞ、

というものだった。とにかくユッコラに出てみたかったので「そうしたい」と返事をした。

3月になって再び連絡。

「TuMeでユッコラを走ること、その他の大会に参加すること、そしてフィンランドでの1ヶ月間の滞在先、移動、すべてOKだ。」

お願いしていたこと以上の内容にびっくりした。実際のところ彼はもうコーチではないので現地でもコーチ的なアドバイスはなかったのだが、それでも遠まわしにアドバイスしてくれる彼の言いぶりがなんだか日本人的で本当にナイスガイ。仕事に子育てととても忙しい中、友人としての彼の協力にはとても感謝している。

職場にも2ヶ月の遠征計画を考えていることを伝えた。1人が2ヶ月抜けることが厳しいことは十分に分かった上での決意、迷惑がかかるなら職を辞してでもという申し出に「その覚悟と目標を応援したい」といって休職扱いで対応していただけることになった。職場のみなさんの理解と協力にも本当に感謝。

日本での厳しい国内選考もなんとか生き残り、世界選手権代表へ。遠征計画が実現のものとなった。

ユッコラに出られる。1000人以上のマスタート、1万人以上が集まる会場、そして7人で70kmを超えるコースを年齢を超えて継走する、その光景を想像するとワクワクして夜も眠れなかった。

フィンランドでの1ヶ月

フィンランド滞在の目的は先述のように2つ。1ヶ月の滞在のうち、最初の2週間はユッコラへの調整として、次の2週間はWOCへの調整として捉えた。なおEOCは最新の国際レベルを把握するための参加、フィンランド後の旅行はWOCへ向けたリフレッシュ期間、チェコでの滞在のうち最初の1週間ちょっとを現地トレインでの調整、残りの1週間はWOC期間として遠征プランを組んでいる(表1)。

表1. 遠征プラン(2008年)

期間	内容	目的	滞在先
May.23-Jun.01	EOC	国際レースの目安把握	ヴェンツピルス, ラトビア
Jun.02-Jun.15	フィンランド滞在	ユッコラへの調整	エスポー, フィンランド
Jun.16-Jun.29		WOCへの調整	
Jun.30-Jul.03	旅行	リフレッシュ	スロバキア ~ ポーランド

Jul.04-Jul.12	チェコ滞在	WOCへの調整	オロモウツ, チェコ
Jul.13-Jul.21		WOC本番	

フィンランド滞在の拠点はイーキスの自宅のある町の隣町エスポー (ESPOO) のオリエンテーリングクラブ「エスポー・スーナタ (EsSu)」のクラブハウス。エスポーはヘルシンキの西隣の町で電車で30分弱。EsSuのクラブハウスは森の入り口に立ち、キッチン・シャワー・サウナを完備した快適な環境で自炊生活。そこを拠点に午前、午後の2回のトレーニングセッションを組み、体調を見ながら調整した。



Jun.2-8

最初の1週間はフィンランドトレイン、マップへの対応に終始した。コースを走ると途中で必ず1回はコンプリートロストをしてしまい、大きなミスが生まれた。途中でどこにいるのかよく分からなくなってしまう。それを少なくしていくための方策を考えるので精一杯。平日は自主トレと夕方の練習会であるイルタラジツ (IltaRasti)、週末は大会に参加。土曜のオリベンデンボンニスタス100周年イベントはユッコラのチームセレクションという位置づけだったが大きなミスを3つもしてしまう。日曜のスト・ゲームズでようやく大きなミスがなくなった。しかしスピードのあるオリエンテーリングには程遠い。

表2. Jun.2-8 スケジュール

日	午前	午後
2	タリン観光	イーキス家へ移動
3	ジムトレーニング (中)	EsSuへ移動
4	自主トレ (中)	ウォーキング (低)
5	自主トレ (中)	夕方練 (高)
6	レスト	サイクリング (低)
7	オリベンデンボンニスタス100周年イベント (高)	
8	スト・ゲームズ (高)	

Jun.9-15

ユッコラウィーク。ようやく対応できるようになってきたトレインの中をいかに速く走るかを考える。さらにユッコラへの調整のためトレーニングを抑えるように注意。平日の自主トレでは1週間前に走ったコースをゆっくりと見て回り、捉えられるものが増えていることを確認。木曜晩の大会フォルッサゲームズでは1つミスをしたが、ある程度メリハリをつけスピードを出したレースに仕上げる事ができた。金曜からユッコラ会場入り。詳細は後述。

表3. Jun.9-15 スケジュール

日	午前	午後
9	レスト	サイクリング (低)
10	レスト	自主トレ (低)
11	ウォーキング (低)	自主トレ (中)
12	レスト	フォルッサ・ゲームズ (高)
13	ウォーキング	ユッコラへ移動
14	ユッコラ準備	モデルイベント (低)
15	ユッコラ (高)	EsSuへ帰宅

Jun.16-22

ユッコラが終わり、WOCへ向けた最後の調整期間へ。WOCではスプリントも走るようになったので、ヨーロッパにきてしていなかったスピードトレーニングをポイントトレーニングとして組み込む。週末は夏至祭のため大会もなくカウニアインとエスポー近郊でイーキス家の改装後の掃除を手伝いつつ自主トレ。疲れを感じるので週末は量と強度を抑えたトレーニングにした。

表4. Jun.16-22 スケジュール

日	午前	午後
16	レスト	ジョグ(中)
17	サイクリング(低)	雷雨のため中止
18	ペース走(中)	夕方練(高)
19	自主トレ(低)	インターバルラン(高)
20	サイクリング(低)	レスト
21	自主トレ(中)	サイクリング(低)
22	ペース走(中)	ジョグ(低)

Jun.23-29

WOC前最後の追い込み期間。引き続きスピードトレーニングを組み込む。水曜日にはセント社のパーティーに招かれた。

週末にイーキスに別れを告げEsSuクラブハウスを離れ、トゥルクの隣町ムーミン谷で有名なナーンタリに住むアリの家に移動する。ユッコラにて「ぜひおいでよ」と誘ってもらったため。その後、スウェーデンに渡り、スロバキア、ポーランドと渡りチェコ入りする旅行に出発。

表5. Jun.23-29 スケジュール

日	午前	午後
23	レスト	自主トレ(中)
24	自主トレ(中)	イーキストレ(高)
25	サイクリング(中)	ウォーキング(低)
26	自主トレ(中)	インターバルラン(高)
27	ジョグ(低)	ナーンタリへ移動
28	自主トレ(中)	ウォーキング(低)
29	ウォーキング(低)	スウェーデンへ渡航

ユッコラ ~準備~

ユッコラへの出発は6月12日、木曜の夕方から。この日はトゥルクとタンペレの間にあるフォルッサでワールドランキングイベント(WRE)であるフォルッサ・ゲームスがあるのでそれに参加し、そのままタンペレに向かい、週末まで滞在するのだ。エスポーに住むTuMeのハリと一緒に会場へ行くことに。ハリは湖のそばの大きな屋敷を改造したアパートに美人の奥さんと住んでいる。ハリもかなりのイケメン。職業は数学教師。しかも現在10週間の夏休み中！次に学校に行くのは8月だ、といていた。休職中の俺より夏休みが長いなんて。。。さらに秋休みと冬休みがあるというのだからなんともうらやましい。

そんな話をしていたら会場へ到着。この日のスタートは19:30過ぎ。それでもH21Aの真ん中あたり。ユッコラが近いので世界中からなじみの顔が集まっている。WREだけどエリートクラスはなくてH21Aが最高クラス。なのでスタート待機所には普通の人もある。この日はなかなか良い感じで走れて集団をひっぱたりもしたが、1ヶ所までも大きなミスをしてしまい、34分。トップは22分なのでまだまだダメな感じ。それでも先週末のレースに比べればよい感じになってきている。対応できるものが増え、速くを見ながら走れるのだ。



レース後、会場にはTuMeのメンバーもチラホラ。日本から来たコイです、と挨拶し、いよいよユッコラなんだなと気分が盛り上がる。ハリは途中で目に枝が入って違和感を感じるので途中で止めてきたそうだ。「大事なのはユッコラだからね」と言っていた彼はTuMeのBチームを走るトップランナー。「さあ行こう」と促されて彼の車に乗る。これから宿に行くんだよね、と確認しなかったのがまずかった。彼とレースの内容について話をする。行きとは違う道なので宿に向かってるんだなと思っていると、なんとなく見覚えのある風景。標識を見るとヘルシンキに近づいている。

「今エスポーに向かっているの？」

と聞くと

「だってエスポーに住んでいるんだらう？」

と答えるハリ。ガーン、タンベレに行くんじゃなかったのか。そう言うと

「でもユッコラ会場には早い人でも金曜夜から泊まるはずだよ。今日から行っても泊まる場所がないよ。」

んん？イーキスからはそう聞いているんだが、どこでどうそうなったんだらうか？聞き間違ったのかな？イーキスに電話するもつながらない。結局イーキスの家まで戻ってしまったが、すでにイーキス一家も家族で旅行に出かけてしまっている。一人であたふたしていると、ハリが

「よし、明日トゥルクへ行くといい。明日の昼ごろにバスが出るはずだ」

と言ってTuMeのメンバーの連絡先を教えてくれた。その日は結局EsSuのクラブハウスの寝床の戻ってきて就寝。帰ってきたのは24時。明日は何時にトゥルクにたどり着けばいいのか不安なまま眠る。

翌朝、金曜日。朝起きてすぐに教えてもらった番号に電話する。「今日ユッコラの会場に行きたいんだ。トゥルクに行けばバスが出るって聞いたんだけど」と朝早くから起こされたであろうよくわからない電話に怒りもせず、彼は

「OK、英語はよくわからないからあとで連絡する、とにかく昼までにおいで」

と言ってくれた。とりあえず行き先が決まった。エスポーからトゥルクまで急行で1時間半。電車の中でハンヌというTuMeのユッコラマネージャーから電話。

「14時半に駅に迎えに行くよ」

なんとかユッコラには行けそうだとホッと一安心。昼前には着いたので、5年ぶりのトゥルクの街をブラブラ。約束の時間にミニバスに乗ってハンヌが現れる。

「私は明日行くことになっているんだ。だからこれから君は英語の話せないおじいさんといっしょに会場へ行くんだ。でも大丈夫。彼らの言うとおりにしてればいいよ。」

その後TuMeのメンバーの家で待ち合わせ。お茶をご馳走になり日本について話していると3人のメンバーが集まってきた。



1人はラウリ。英語がまったく話せないおじいさん。それから陽気なライネ。いつもビールを片手に下ネタを連発する。それと無口なペッテリ。どうやらこの3人と行動をとるらしい。ライネとペッテリは少しだけ英語が話せる。2台の車に分乗。ラウリの運転するミニバスに乗る。ラウリは英語が分からないのでまったく会話をすること

とがなく会場へ。ユッコラの会場には18時ころに到着。ライネたちの車はまだ到着していない。滑走路に車がポツポツと止まっている。先のほうにミリタリーテント、あそこに泊まるんだな、と想像していたらラウリはその反対側の野っぱらに降りてウロウロしている。よく見るとテントのサインが立っている。もしかしてこの何もないところに寝ののだろうか。ラウリは持ってきたテープを使って陣地を張る。コイ、コイと呼んでテープを引っ張るのを手伝ってとジャスチャー。そうしているうちにライネたちのワゴンも到着。タンクを下ろして、飲み水場まで水を汲んで来て、と指示。任せろ、と競技会場の方へ向かう。すでに会場は出来上がっていてユッコラ通りという出店の列やステージ、巨大スクリーンが並んでいる。すべてがビックスケール！



水を汲んでくると、彼らはすでにテントを組み立て終わっていた。今日はこれだけ、と言って2つのテントができていた。

「コイ、これから走り行くぞ」

とライネ。今日は動いていないからちょうどいい、とみんなとジョギングする。すると2kmくらい走って農家の中へ入っていく。知り合いの家か？と思っているとTuMeのメンバーで顔見知りのウクライナのスラヴァが出てきた。おお、ここが昨日泊まるはずだった宿？ 中に入るとトップチームの面々。農家を借り切って準備しているんだな。スラヴァが

「ごめん、昨日はお前を乗せていくことになっていたらいいんだが、知らずに先に出てしまったんだ」

そういうことだったのか。まあ俺は今ちゃんとユッコラに来ているからノープロブレム、と答えてテントへ戻る。シャワーを浴びて夕食。ライネは相変わらずビールを飲んでいる。これはフィンランドの特別なフルーツを使ったケーキだ、とか、このビール会社は俺のスポンサーになるべきだ、とかお互い片言の英語ながら楽しく夜が更けていく。

そして就寝時間。

「さて、コイはどこで寝るんだ？」

神妙な面持ちで聞いてくる。え？ 多分ここだと思うけど、と言うと

「冗談だよ、もちろんここで寝るんだ。寝袋はあるよな」

とみんなで笑う。いやいやまた寝床がないのかと思ってしまった。悪い冗談だ。この日は快晴。そのおかげで野っぱらのテント村の晩はかなり冷え込んだ。寒すぎて熟睡できず。しかも周りのテントは夜中を過ぎても騒がしい。3時すぎに夜が明けて暖かくなってきたころによく眠れる。



8時に起きて朝食。朝食後にユッコラ通りに買い物へ。今晚の寒さに耐えるためセールに出ているシャツとトレーニングパンツを買う。それからトレイルランシューズ。日本ではなかなかサイズがないデカ足君にはこういう機会は重要なのだ。ショッピングから戻ってくると3人はテント設営を始めていた。三角屋根のインディアン風のテントを4人でどんとどんと組み立てていく。気づいたら回りにもたくさんのテントが出来ている。昼すぎにテントが設営し終わり、開会式が始まる音が聞こえる。

「俺、チームメンバーの名前も顔も知らないんだけど、紹介してもらえるのかな」

と着いたばかりの同じチームの3走ティモにあいさつしたあとに聞くと、スタートの前にイントロダクションがある、と言う。ひとまず夕方まではフリータイムのようだ。女子リレーのヴェンラ(Venlojen Viesti)のスタートを見に行く。こちら900人のエントリーというからかなりの迫力。ユッコラはこれの1.5倍で、さらにみんながランプをつけている。どんな感じなんだろう。期待は膨らむばかり。そしてモデルマップで軽くトレーニングへ向かう。16時ころに戻ってくるとトルクからのバスが到着。さらに多くのテントが設営されていた。ハンヌとも再会。忙しそうに必要なものを確認している。



どこかで見た顔、と思ったらナンタリのアリとその子供たちだった。アリはかつて高橋善徳さんが滞在していたゲストハウスのご主人。こちらの顔を見ると

「日本から来たコイズミだろ？」

と話しかけてくれた。実はあなたとは会ったことがあるんです、と言うと

「ヨシノリがいるときに遊びにきた奴だな。」

と当時の話で盛り上がる。ぜひ遊びに来いよとお誘いを受けたのでお言葉に甘えることにしてフィンランド最後の数日を過ごすことにした。

「俺とお前は同じチームだな。俺はヨシノリとも同じチームだった。今回はお前と一緒に。いいことだ」

そういえばアリは英語はあんまりしゃべれなかった気がするのだが、この5年のうちにしゃべれるようになったのかな。

再び競技会場へ向かいウロウロ。ヴェンラはすでにウイニングランが終わっていた。会場で食事を取って、18時ごろに仮眠を取るべくテントに潜り込む。何人かの若者も入ってきた。おかげで少し暖かく、寝不足のためかいつの間にか眠っていた。

ユッコラ ~レース~

仮眠から覚めたらすでに10時。1走のスタートまで1時間。1走のメンバーはすでにヘッドランプのバッテリーを背負ったり、靴紐をしっかりと止めたりと準備を始めている。トップチームのメンバーだけではなく、すべての1走メンバーが緊張感を漂わせている。あの優しいようなハンヌ(Cチーム1走)や我がチームのアリも興奮ぎみ。ちなみにTuMeからは7チームが参加。AとBは上位を狙うチーム、CとDは競技的なチーム、Eはまだ若干競技的、F,Gはあんまり競技的ではない、とはイーキスの弁。私はセレクションレースがポロポロだただけになんとかDチームの7走に入れてもらった。そういえばイントロダクションは？誰がどのチームかわからない。まあDチームの6走はラウリだから、彼の動きさえ見ればなんとかなるはず。

そしていよいよスタート時間が迫る。スタート20分前に競技会場へ向かうが、すでに観客が何重にもなっていてスタートレーンが遠い。なんとか中へ中へと潜り込み、様子が分かるところまで近づく。すでに選手は中にいてウォーミングアップをしている。スタートを待っていると雨粒がポツポツ、あれ？昼はいい天気だったのに。通り雨が本降りか、とにかく雨足は強くなり始める。そしてスタート5分前のコール。

3分前

1分前

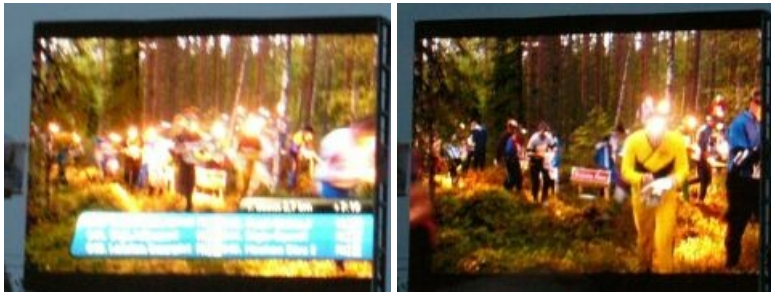
30秒前

20秒前

10秒前

バンバンバンバン！

大きな号令とともに湧き上がる観衆。ランナーはまだ見えない。しかしすぐに大きな明かり。先導車のようだ。その後ろから続く光の群れ。スピードもかなりのものだ。おおー、これがユッコラか！興奮気味にランナーを見送る。先導車は脇に逸れ、選手たちは森の中へと吸い込まれていく。数分後、すべてのランナーが森の中へ消え、観客はそれぞれの場所へ戻っていく。しばらくスクリーンを眺める。森の中で待ち構えるカメラ。最初は暗い森しか映っていない。やがて遠くから一筋の明かり。すぐに光の列となり、次々とパンチ。トップが過ぎていく。TuMeのAチームも順調だ。100位以下はもうよくわからない。画面は光の群れで埋め尽くされている。なんだかオリエンテーリングではなくて何かの芸術パフォーマンスを見ているようだ。ヤンネ・サルミがトップだ！といったことを伝える実況。1走の帰還を待っていたかったが、雨がどんどん強くなるのと、翌朝の長いコースを走りきるためには今からしっかり寝ておかないと、と思いテントへ戻る。雨雲のおかげで昨日ほど冷え込んではいない。しかし野っぽらなのでやっぱり寝にくい。こんな寒い中、ゆっくりとも寝られない、そして雨の中、長く辛いコースを走る。どうしてこの人たちはこんなにまでしてオリエンテーリングをするのだろう。そしてどうして俺は今ここにいるのだろう。なんだか不思議な感じがした。



次に起きたときは4時。8時過ぎにスタートだろうと聞いていたので、いつもどおりレース4時間前には起床し、朝食を取る。しかし7走は14kmちかくある。きっとメンバテするだろう。そう思って日本から持ってきたサプリメントで糖分補給の準備。いつもどおりの準備。どんな状況でもそれが一番なんだ。6時過ぎに3走のティモから、15分前に5走がスタートした。順調なら1時間でゴールする。6走はちょっと長いから君は8時半頃かな、と聞かされる。まさに予定通り。でも8:30といたらウム(繰上げ)スタートの時間だ。間に合うのだろうか心配だ。ひとまず6走のラウリを応援しようと会場を探すも見つからない。アナウンスはTuMeの名前を連呼している。優勝争いをしているのだろうか。会場内には自分たちのチームが何走の何キロ地点を通過したかが分かるマシンが置いてあるのだが、うちのチームは途中でうまくEMITが反応していなかったらしく(通過は証明されているけど)その機械では確認することができなくなっていた。そうこうしているうちに7時が過ぎた。ラウリはもう行ってしまったのだろうか。優勝チームのウイニングラン。ヴァレンティン・ノビコフが抜いてきた！とアナウンス。優勝はデルタのようだ。TuMeのAチームも戻ってきた。ひとまずテントに戻り、出走準備。まだ8時前、スタートまでは30分以上あるだろうけどラウリをチェンジオーバーで待たせてしまうよりはいいや。

8:20頃、チェンジオーバーのリミットを8:30から9:00に繰り下げます、マススタートは9:15にします、とアナウンス。ラウリはまだ現れない。けど30分余裕が出来た。一時止んでいた雨が再び降り出す。ラウリ、来ないかな。ゴールレーンの反対側からはアリが様子を見守ってくれている。40分、50分、時間は過ぎて行くもラウリは現れず、9時が過ぎてしまった。チェンジオーバーゾーンを区切っていた木枠が取り崩されていく。そうか、リミットからウムスタートまで15分も時間があるのはこの準備があるからなんだな、と思いながら眺めていると、ゴールへ向かうラウリの姿！懸命に走る。パンチングフィニッシュ後、地図置き場までダッシュをしようとするラウリ。しかしすでに時間が来てしまったことを知り、肩を落とす。遠目からそんな彼の姿を見ていて、やはりリレーはよい、と心が熱くなってきた。地図置き場が開放され、各自の地図の前へ、とアナウンス。地図の前に立って待っていると、同じくウムスタートのライネが「コイ！グッドラック！」と声をかけてくれた。いよいよスタート。

スタート5秒前、というアナウンス。いざ、と構えると周りの人たちはすでに地図を持って動き出してしまった。ええー、いいの！？と思うも、馬群に沈んでは最初から躓いてしまうと慌ててスタートし、少しでも前のポジションを取ろうとダッシュ。しかし時は既に遅く、あっという間に詰まってしまう大渋滞。のろのろとスタートフラッグまで進む。なんとか合間を縫って前に進み出る。1番までは短い。ひとまずそこまではなんとか前に出たい。スタートのトライアングルでプラン通りの方向に進み出る。しかしその先にはすでに道のように人の列。アタックポイントにしていた傾斜変換で一度地図を見直す。しかしそのときに人の動きの渦の真ん中が目に入る。地図が示すのと同じ位置。あそこがコントロールね。。。

そんな感じで中盤までオリエンテーリングというよりもランニング大会が続く。9番で少しミス。後戻りすると少しずつ抜いてきた人々がどんどん先へ向かう。やれやれ、また一から抜き直しだな。そんな感じ。12番は2キロちかいロングレグ。気づいたら大集団ではなく数人のグループに。「お、抜け出したか？」と思うもコントロール付近で再び大集団。。。しかも明らかに60歳くらいの年配の人が前を走っていたりして、「こんな人でも俺と同じくらい走るのがか」とショックを受ける(もっとも同じ時刻にスタートした人かは不明だが)。その後森の中を進む長めのレグが続き、少しずつ人数が減っていることが分かる。きっと悪くはないはずだ。適度な人数がいるので速いスピードを維持でき、ナビゲーションへのヒントにもなってくれている。15番くらいでようやく折り返

し。長い。そして16番で再び大人数のグループを形成してしまう。短いコースと合流したようだ。再び渋滞したり、ばらけたり。

でも同じコースを走っている人は同じくらいのレベルの選手だと気づく。先ほどからスウェーデンのクラブらしき若者が前に出たり、後ろにいたり。勝手にライバル視。ようやく会場のアナウンスが聞こえる位置まで戻ってくる。会場脇のスペクテーターコントロールをパンチ。残り1kmちょっと。スウェーデンの若者が前に出る。負けてなるものかと喰らいつく。残り2つ目のコントロールで地図を読むためにスピードを緩めた彼の脇を抜け前に出る。ラストコントロールはとにかく北に直進すればいい、と賭けておいてダッシュ。後ろから追いかけてくる若者。ラストコントロールも先にとり、400mのテープ誘導。2人で猛然とダッシュ。ゴールレーンでも1人抜いた。最後は息切れした若者を引き離しゴール。久しぶりに気持ちのいいゴールだ。ゴール後に軽く握手し健闘を称え合う。

結局、最終的なチーム順位は何位で、自分の走りがどうだったのかわからない。でもキロ8分を切っているのだから、フィンランドに来てからは一番いいペースだ。きっと良かったに違いない、ということにして結果が張り出されるのを見届けることなくチームテントへ戻る。すでにトップチームは反省会を終え、解散しかけている。なんだか本当に規模が大きすぎて、自分がどこでどうしていいのかわからない。自分のチームは今誰が走っていてどんな具合なのか、そういえば結局自分のチームの4,5走がどんな人だったのかもわからないままだった。チームメンバーやクラブ員が全員揃うこともなく、パラパラと来てパラパラと解散していく。後で聞いた話だと今年はチーム・ストで1走を走ったイーキスも、自分がゴールするとチームのゴールを見届けることなく帰ってしまい、あとでネットで結果を調べたのだという。まだ走っている人がいても、テントや荷物の片付けは始まり、先に帰っていく人もいる。この辺はだいぶ日本とは習慣が違う。

そんなわけで後日調べた結果、チームの順位を50以上押し上げるなかなか良いレースだったようだ。これまでがいまいちただだけにイーキスにも「すごいじゃないか」とずいぶん驚かれた。渋滞がなければもう少しよかったかな、いや渋滞になるほど人がいたから良かったのかな？同じくウムスタートだったライネとはレース途中で何度か出くわしたが最後は引き離れた。「お前は俺に勝った」が悔しそうだったが、調べてみると10分差。いやいや、あなたは既に50歳を過ぎてのに14kmのコースで10分しか差がないのですか！？これにもまた驚きであった。さすがフィンランド、層が厚い。

表6. TuMe4 ユッコラ2008 結果

走順	名前	順位 (レッグ順位)	タイム (レッグタイム)
1	Ari	250位	1:33:47 (1:33:47)
2	Markka	334位	3:34:20 (2:00:32)
3	Timo	367位	5:39:38 (2:05:18)
4	Jussi	326位	6:44:58 (1:05:19)
5	Uldis	463位	8:36:47 (1:51:49)
6	Rauli	428位	10:07:39 (1:30:51)
7	Koizumi	373位 (171位)	11:56:20 (1:48:41)

夢の続き

ユッコラが終わり、TuMeのテント村を片付ける。設営のときは4人で半日を費やしたのに、みんなで片付けるのとあっという間だった。もとの野っぱらに戻った場所を見るとなんだか急に寂しくなってしまった。夢にまで見たユッコラが終わったんだなぁと。。

ハンヌやライネはまだ戻らない7走の若者を待ってからバスで帰るといふ。「コイはトゥルクからエスポーまで帰らなきゃいけないから」と先に戻るミニバス、つまり行きと同じラウリの運転する車に乗って帰れよ、と言ってくれた。TuMeの多くみんなとは一晩だけだったけど、みんな古くからの仲間のように接してくれた。とくに3日間過ごしたライネたちとの別れは本当に寂しく感じた。別れ際、みんなとあいさつを交わした。

「またユッコラに戻ってくるよ」

「来年か？」

「分からないけど、次に来るときは日本のチームで来たい。次はライバルだな！」

みんな笑ってくれた。

降り続いた雨は会場を出るころには青空に変わっていた。美しい北欧の青空。またここに帰ってきたい。約束どおり日本の仲間たちを連れてこよう。夢の続きが決まった。いつか必ず！

ユッコラ ここがすごい

とにかく参加者が多い！！

今年のユッコラへの参加チームは1,435。1チーム7人、1人が重複して走ることは基本的にないので単純に1,435チーム*7人=10,045人！さらに土曜の午後に開催される女子リレーのヴェンラ (Venlojen Viesti) へのエントリーが951。こちらは4人リレーなので総勢3,804人、合計13,849人が一日中オリエンテーリングを繰る広げることになるのだ。年齢層は幅広い。15歳以上からの参加が認められ、70代より上の人もいるようだ。

ちなみにヴェンラを走っている男子はいないが、ユッコラを走っている女子選手はけっこういた。しかもウム(線上げ)スタート回避のためか前半に男子を配置し、終盤の長い区間を任されることが多いらしく、なかなかたいへんそうだ。なおあくまでメインイベントはユッコラのように、ヴェンラが土曜の夕方7時くらいにはほぼ終わりといった感じだったが、それから会場入りする人も大勢いた。

これまでの優勝チームはフィンランド、ノルウェー、スウェーデンのクラブだけ。2000年前後はノルウェーのクラブが席巻していたが、ここ数年はフィンランドのチームが勝っている。といてもトップチームは海外からの選手が多くを占めている。今年も最後はロシアのヴァレンティン・ノビコフが逆転してウイニングランを決めた。かく言う私も外国人選手だが、助っ人と呼ばれるほどの戦力にはなっていない。

なんといってもマスタート！！

そして大人数が参加するユッコラの目玉といえばマスタート。土曜の2:00pmのヴェンラ(女子リレー)1走のマスタートを見ただけでも大迫力であったが、ユッコラはそれよりも多いチームが出場する。そしてスタート時間は11:00pm！まだ薄暗い程度とは言え、鼻息の荒い男たちがヘッドランプをつけて並んでいる。その光景だけでも相当なものだが、それがスタートの号令に合わせていっせいに動き出す。先導車に導かれ、押し寄せる光の集団。興奮する観客。これを見ただけでもユッコラへ来て良かった、と思ってしまう。しかしこれはまだ始まりにすぎないのだ。

ヴェンラスタートの動画 → [こちら](#) (freeMLの動画サイトへリンク)

ユッコラスタートの動画 → [こちら](#) (freeMLの動画サイトへリンク)

どの区間も長くタフ！

そんな多くの参加者が集まるユッコラだが完走へのハードルは意外と高い。それはコース距離を見れば分かるだろう。最短で7.8km、多くの区間は10km以上を走ることになる。10代の若者から60歳以上のベテランまでがこれに挑む。いくらフィンランドといってもみんながみんな速くて上手なオリエンテーリングをするわけではない。TuMeには4時間ちかくかけて7走を走ってきた若者もいた。

さらに1~4走にかけてはヘッドランプの装着を推奨されている。この日のタンペレ地方の日の入りは11:09pm、日の出は3:42am。日本に比べればかなりの日の長さであり、夜といっても本当に暗くなるのは1時間程度であとは薄暗闇だが、それでも森の中はだいぶ暗い。そのなかを迷うことなくナビゲーションしてこなくてはならない。また明るいといっても5走以降は朝の4時、5時のスタートである。ゆっくりと眠ることもできないまま、普段とは違う特殊な状況の中を走ることになるのだ。

そしてウム(線上げ)スタートは8:30am、スタートから9時間半(実際は9:00amに変更になったので10時間)。これまでに継走できなかったチームは走順を問わず一斉線上げスタートになってしまう。ウムスタートまでに7走がスタートしたチームは実は400くらいで、まだ5走が待機しているチームもある。残り1000近くのチームから1~3人が同時スタートをするので、1走スタートと変わらないマスタートとなる。ちなみにゴール閉鎖は14:00。ウムスタートから5時間も待ってくれる。

表7. ユッコラ2008のコース

区間	距離(km)	登距離(m)	明るさ	優勝チーム ゴール時刻
1	11.4-11.5	370	明/暗	0:22am
2	12.2-12.3	410	暗	01:45am
3	13.0-13.2	400	暗	3:16am
4	7.8-7.9	260	暗/明	04:10am
5	7.9-8.0	280	明	04:58am
6	9.8-9.9	380	明	05:58am
7	13.7-13.8	510	明	07:18am

Total	76.6	2610		8h18m
-------	------	------	--	-------

とにかく会場がでかい！

ユッコラ会場には1万人以上が集まる。ちなみにイーキスが住んでいるカウニアイネン (KAUNIAINEN) という市の人口は8千人。1万人といたらこの国ですでに都市である。そんな一晩限りの街が森の中に現れるのだ。

今年の会場はタンペレの北にある軽飛行機用の飛行場とサーキット場。軽飛行機用といっても1000m以上の立派な滑走路が備わっている。



その滑走路の両脇にテント村があり、片方が軍隊が設営したミリタリーテントで、もう片方が自分たちで設営するテントスペース。ミリタリーテントの利用はちょっと割高らしいがテントを持ち込むのが面倒な海外のクラブが多く利用しているようだ。フィンランドのクラブの多くは滑走路反対側の野っばらや森のなかを整地してクラブの宿泊スペースとして利用する。こちらは区画だけ決まっていてあとは早い者順。いい場所をとるべく先遣隊が陣取りをするのだ。



滑走路の上は駐車場。ユッコラのスタートに合わせて続々と車が集まってきて、最初はポツポツと止まっていた車が気づけば満杯に。それに加えて各地からクラブ員がバスで押し寄せてくる。さらに飛行場の周辺の牧草地も駐車場。主にキャンピングカー用のスペースになっている。どこからどこまで会場なのかもわからない。



そしてメインアリーナにはユッコラ通りと名づけられた商店街が出来る。オリエンテーリング用品はもちろんレストランやスーパー、サウナ、郵便局までが開設される。これらのショップは金曜の午後オープンし、土曜の朝から日曜昼の閉会までは休みなく開いている。



商店街を抜けた先が競技会場。大型のテレビスクリーンやステージ、巨大なゴールレーンや地図置き場がある。スタート脇にはもうひとつのチームテントスペース。こちらはスタート待機や競技情報を得るためのスペースで、昨年の順位によって良い位置から順に割り当てられているようだ。ゴールレーンや地図置き場も人数が人数だけに大きく、戻っていたメンバーを見逃す人も多い。チェンジオーバーゾーンで仲間の名前を叫び続ける人もいた。またそれ用にお立ち台があって、その上から仲間を探したりしている。

テレビ中継や専用ラジオ局がある

そんな大きなイベントなので当然フィンランド国内でも注目されている。テレビ中継が入り、競技の様子はもちろんのこと、コンサートの様子やゲストの話などいろんな情報を伝えている。特に今年は60回目の記念大会であったので、特設スタジオではゆかりのある人が呼ばれて、これまでのエピソードを紹介したりインタビューに答えていたりしていた。さながら箱根駅伝か24時間テレビのような感じだ。

そしてユッコラ専用ラジオ局まである。大きな会場なので放送も届かない、ということで競技情報や天気予報、迷子の情報まで流しているのだ。

軍隊が協力している

まあヨーロッパではそれほど珍しいことではないが、テントの設営や会場の設営に軍隊が多く協力している。会場には戦車や対空ミサイルが飾られ、子供たちが戦車に乗ったりして遊んでいる。乗り物好きとしては嬉しい企画。こうすることで軍隊の身近さや存在意義を示しているのだろうと思う。



TuMeの本気度

TuMeのトップチームは毎年上位に入る強豪。昨年は16位に終わってしまい、今年は雪辱を期すべくトップチーム(A,B)はかなり気合が入っていた。それはスタート前の緊張感からも感じる事が出来たし、アンカーまで6位につけていたのに8位でゴールしてしまったときみんなの落胆振りからも彼らの本気度が感じ取れた。

さらにトップの2チームは宿舍まで用意してある。町外れのこんな場所にホテルなんてあるのかなと思っていたら、彼らの泊まっている宿は普通の農家。農家を借り切ってまで最高の舞台に備えようとしているのだ。ユッコラの強豪チームではこのくらい当たり前なのかもしれないけど、そこまでやるんだ、と思い知らされた瞬間だった。ちなみに農家は本当に普通の農家。そこを彼らは我が家のように使いまくっていた。日本人なら遠慮しそなところだけど、そのへんは文化の違いなんだろう。

オリエンテーリング

必要なオリエンテーリング

フィンランド(北欧)のオリエンテーリングで求められることについて今回の印象をまとめてみる。

フィンランドでのオリエンテーリングはやはり難しい。何が難しいのかというと一瞬も油断できない難しさがある。トレインに対応できないか、というとそんなことはない。ちゃんと地図を見て現地と対応させれば無難にこなせるし、複雑な地形でもシンプルなプランで走ることもできる。とにかく油断ができない。集中力の使いどころが日本よりも断然に多い。

日本の場合、尾根まで走る、次の尾根の分岐まで走る、コントロールのある岩まで沢を下る、といったリズムで地図を先読みしながらどんどんと目的地に近づける。チェックポイント(CP)での確認作業にあまり時間を要さずとも自信をもって次へ進める。

フィンランドの場合、アボカリオのピークを走る(ここは正しいピーク?)、湿地の淵をたどる(ここは正しい湿地?)、大きな岩ガケからコントロールのある岩を目指す(ここは正しい岩がけ?)、といった具合に、必ずCPでの確認作業に一手間取られる。これが抜けると、手前のピークだった→走っているうちによくわからなくなる、とか、正しい岩ガケだったけど不安なまま走る→手前で不安になってその先まで突っ込めない、といったことになってしまう。



これは別に日本でもフィンランドでもチェコでも同じだったりする。CPで絶対正しいと確信度を100%ちかくに保ちながら走り続けることが正確なナビゲーションだし、スピードを上げて走れる自信となる。1点での集中のしどころをちゃんと押さえていれば問題なく走れる。

ただ日本だとラインがはっきりしているのも、そのラインに乗りさえすればCPを確定する作業はそんなに難しくなく、かつ不安でもとりあえず進んじゃえばなんとかなったりする。たまたま行けている、というやつ。ただフィンランドのようなフラットなうえに同じような特徴物の多いトレインや、チェコのように何もなかった広い斜面の中で自信をもって進めるというのは、その手前での確信度がとても重要になってくる。どんな簡単なCPだと思っても、間違えている可能性があるし、不安を感じてしまう要素が含まれている。1点での確認作業に対する重要度が非常に大きい。

ん？ということは結局のところ地図と現地との対応ができていない、ということじゃないのか？？そしてさらに言えば、その中を正確に進んでいるという技術に対して信頼性がないということだ。つまり下手クソってことだな。正確な直進性、正確な距離感、正確な地形判断力、この辺が欠けている。もっとまじめに練習しなきゃだめ。

そしてフィンランドでの本当の難しさはそういう対応力とか技術力とかではなくて、コースを通していているんな場所その手の集中すべき要所が散りばめられていて気が抜けない、ということだ。相当な集中力、精神力が必要となる。きっとこれは、2時間本当に集中して地図読み(プランニング練習)ができるか、といった精神力と同じものだと思う。



ところでルートプランニングではそんなに劣るとは思っていない。中間にある微地形エリアでも使えるラインは必ず存在する。とくに外枠から攻める、というのがポイントだ。ピークの淵、湿地の淵、森の淵、微地形エリアの淵、こういうラインをラインとして認識できれば日光和泉(七里)あたりを走っているような感覚でプランニングできる。

技術的な問題はやっぱりアタックポイント(AP)~アタックの間にある。絶対確実と思えるAPを設定し、そこから絶対確実な技術をもってアタックする。コントロールが見えなくてもあそこだな、と踏み込める確信度が必要になる。そうしないと手前の岩の中を1つ1つ探すことになってしまうし、ヤブのなかをガサガサすることになってしまう。

体力的にはもうただひたすらタフさが必要。アップがないと思われがちだが、アップ以上にコースはタフだ。ふかふかのコケやブルーベリー畑の上を走るため足元が取られる。岩場や岩の段差への乗り降りが多い。湿地ではひざ上まで漬かりながらも高いスピードを保たなければならない。視界が遮られさらに走行の邪魔をする下枝の残ったエリアでもスピードを落とさず方向を曲げずに最短距離を走らなくてはならない。けれどこういうことは日本でも準備できる。ただそういう場所を走っていない(走らせていない)だけである。日本で本当に速く走ることが出来れば世界中どこでも速く走ることができると思うのだが。

マスタートの教訓

期せずしてマスタート(ウムスタート)を体験できたので、すでに触れた内容も含まれるが教訓を簡単に。

スタート数秒前には動き出す

日本と同じように「10秒前」とコールがあるが、スタートの号令まで待たない。最初の5秒くらい前にもう我慢できずに地図を取って陣取りが始まる。少なくとも後ろの列のほうはそうである。これをいちいちルール違反だ、とか思っても群集の動きはもはや止められない。

スタートダッシュをかませ

地図を取ったらとにかくスタートダッシュをかまして1列でも前に進むことだ。スタートフラッグまでのテープ誘

導までが最初の勝負。スタート前にトップラインに立っていない限り、スムーズにトライアングルまで進み出ることとはできず、必ずどこかで渋滞にはまる。そうなっても相手にぶつかり、押しのけ、前に進み出る技術とがめつさが必要。でも東京人なら大丈夫。満員電車で鍛えた技術の見せ所。

森の中でも闘いは続く

これはマスタートでなくてもユッコラレベルの大規模大会ならどこでも言えることだと思うが、とにかく人だらけ、道だらけ。もはやオリエンテーリングとは違うスポーツのようにさえ感じる。

スタートフラッグではちゃんとプランニングをする。正しい方向を確認する。そうするとそこには道が存在し、人の列がある。あとはjust running! もはやオリエンテーリングではなく、方向を選んで進むクロスカントリーレースかトレイルランニング大会。しかし人の列は突然、人の群れに変わる。そこがアタックポイントだ。みんなウロウロしている。そこで地図を見て現地と対応させる、なんてことをするよりも、人の群れの中心を探したほうが早い。動きの渦の中心にコントロールがある! ナイト区間ならきつと光の中心になっているに違いない。

コントロールは戦場だ。パンチ台に近づくまでは格闘技術がサッカーの突破力が必要だ。押しの強さとか体幹の強さ、あるいは力で押してくる相手をかわず柔らかな技術をもってしてパンチ台へと近づく。パンチングも戦いだ。手の甲を重ね合わせる。横入りしてくる敵をいなす。手の甲を重ね合わせて一番下を目指す。子供のころにやった遊びを思い出すにちがいない。

そんなオリエンテーリングがゴールまで続くが、順調に走れていれば少しずつ群衆の中から抜け出しているだろう。

番外編

その他フィンランドでの生活についていろいろ。

呼び名

4年前にスウェーデンで生活していたときは“Shigge”と呼んでもらっていたけどなんだか発音しにくそうだったのと、呼ばれた自分がいまいちピンとこなかったのも、今回は“Koi”と呼んでもらうことにしている。日本でも最近「コイちゃん」と呼ばれることが多くなってきたし、とくにフィンランド人はJari, Pasi, Mikaなど2文字の名前が多いし。おかげでよく覚えてもらえ、“KOI!”と元気と呼んでもらっている。

食事

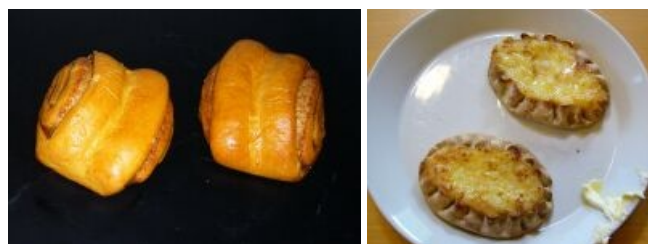
クラブハウスで自炊。朝食はミューズリーとヨーグルトとパン、ハム、トマト、キュウリ。昼は適当にパンとかフルーツをかじったりしている。夕食はパスタや米を主食にしている。基本的にワンプレート+スープ。ここに来て持ってきた味噌汁が役に立っている。味噌のうまさを実感。



お気に入りにはシナモンパン。スウェーデンのシナモンパンは上から見てのうずまき型だったけど、フィンランドのはロールパンみたいに横から見てうずまき型。

それからリゾットをパイで包んだようなフィンランド伝統料理のカリヤランピーラッカ (Karjalanpiirakka)。これもなかなかうまい。温めてバターを塗ったり、通な人はゆで卵をまぶしたソースをつけて食べるらしいが、バター醤油がとても合うことを発見した。まさにおにぎり感覚。

そして麦のお粥。まあいわゆるオートミール。北欧人はジャム (のようなお粥専用の甘いソース) をのせて食べる。ラトビアでは塩をかけて「お粥だお粥だ」と言って食べていたが、ユッコラでの寒い朝にご馳走になったときにそのうまさを改めて実感。ジャム粥もたまらなくよい。



気候

気温は20 前後で過ごしやすい。時々暑くなって25 を超えることがあり、そんな日はみんな暑くてたまらんといった感じになっている。朝晩もそんなに冷え込まない。けど急に曇って強く風が吹き、シャワーのように雨が降ることがあり、そんなときはみんな上着を着込むくらい寒さを感じる。しかしそんな時に限ってTシャツ・単パンで買い物に出かけ、一人空気を読めない感じで凍えている。

森の中

EsSuのクラブハウスは森の入口のトレイルの脇に立地しているため、森の中に入って行く人の様子が良く分かる。午前中から夜薄暗くなるまで本当に多くの人が森を訪れる。ランニングをしている人、MTBに乗っている人、ノルディックウォーキングをする人、バードウォッチをする人などなど。森での活動が日常生活によく結びついている。私たちのようにハードトレーニングをしている人は稀で、多くが気軽に楽しみながらのエクササイズとして行っている点も興味深い。森の中はトレイルが整備され、行き先案内も丁寧に設置されているため明るく開放的だ。家から徒歩10分もしないところに広く大きな森があるからこそできる環境ではあるが、日本の都市計画も壊して作るばかりではない手法をもっと取り入れて欲しかったと悔やんでしまう。



しかし日が長いというのは素敵だ。午後のトレーニングといっても19時とか20時すぎとか、日本の夜のトレーニングとあまり変わらない時間に行うことが多かったが、それでも夜のトレーニングという印象はなく夕方のトレーニングという感じ。明るい中を走ると気分的にもポジティブになれる。もっともフィンランドの人たちは暗い冬を耐えているからこそこの長い夏の日を享受することができているわけだが。



しつけ

イーキス夫妻をはじめフィンランドでの子供のしつけの様子を見ているとずいぶん文化の差を感じる。まず絶対に叱らない。食べ物を落としたり、掴んでどっかに投げたりしても何やってんの？くらいの反応。逆にちゃんと食べられたり、なにかに成功するとみんなで拍手をしてあげる。ただ危ないことをすると(例えば道路のほうに飛び出しそうになったり)、声を強めて「ダメよ！」と注意する。そしてちゃんとその理由を教えてやっている(ように聞こえる)。

それからびっくりしたのが地面(たとえ土の上でも)に落とした食べ物を食べても何も言わない。日本ならばうちいからやめなさい、と取り上げそうなところだが。。。 といつかそもそも土に落としたくらいではまだまだ食べれるとみんなそのまま普通に食べる。アイスは別だけど。とりあえず多少のことがあっても子供は育つということだ。

テレビ中継

フィンランドではオリエンテーリングのテレビ中継が普通に行われている。6/7に参加したオリベンデンボンニスタス100周年イベントの録画放送を見せてもらった。スタートしていく様子や、森の中の様子など有力選手を中心に追いかけている。コントロールは岩などに置かれているのだが、中継するコントロールの脇にはスポンサーの看板が置かれ、中継時には必ずその看板が入り込むようになっている。ユッコラでもテレビカメラが入っ

ていたのと同じような看板があったのだが、コントロールより先に看板が目に入ってきたりして、なんだがなあという感じだ。

選手はみんなGPS端末を背負い、トラッキングして画面上に各選手のルートを見せている。随時結果が出され、2kmのコントロール時点でのタイム差、4.4km時点でのタイム差、そこまでのルートの違いなどを見せてくれる。

レース前後の解説もよかった(なに言ってるかはわからなかったけど)。アナウンサーと解説のヤンネ・サルミ(現フィンランド代表監督、かつての名選手)がコース図を見ながら「このレッグはどうでしょう」「そうですね、このレッグは右回りが早いでしょう。アップが少なく…」といった感じでしゃべっている。きっとヤンネ・サルミのことだから辛口コメントをしているに違いない。レース後には国内ランキングの様子が出される。有力選手が途絶えた合間には森と湖が写され、反射する日光が美しい。なんだかゴルフ中継のような感じだ。

携帯電話

出発前に携帯電話を機種変更して3G対応のものにした。はじめは日本との緊急連絡用にと思っていたがこれが意外と重宝した。なぜならほとんどの国(特にフィンランド)では携帯が普及していて、日本と同じように公衆電話がなくなっている。むしろ空港など特別な場所を除いてまったく見ることがなかった。公衆電話のあったスペースはすべて携帯電話を話すためのスペースになっている。そのため駅に着いたとか、これから向かうとか、そういう伝言は携帯電話でするしかないのだ。しかし日本国内の携帯をそのまま海外に持ち出した場合、すべての通信が国際料金となってしまう。少しでも通信料を安くするためにメールやショートメールで連絡するようにしたが、いやはや帰国後に請求書を見るのが怖い。